

京都大学吉田寮舎の中に息づく京都大学前身創設時寄宿舍
についての調査実測による実証と考察
—京都大学最古の建築施設 そのⅡ—

七灯社建築研究所
山根 芳洋

The Oldest Architectures of Kyoto University
Vol. II

SEVEN LAMPS ARCHITECTURE INSTITUTE
Yamane Yoshihiro

May.25.2012



目 次

- | | |
|--|--------------------------------------|
| I. はじめに | VI. 京都大学前身創設時寄宿舍階段と京都大学吉田寮階段の比較考察 |
| II. 京都大学の歴史と京都大学前身創設時の施設および京都大学吉田寮の概要 | VII. 京都大学吉田寮の床下構造材及び小屋裏構造材から考察する全体構成 |
| III. 歴史資料による京都大学前身創設時寄宿舍建築の解析 | VIII. 結論 |
| IV. 京都大学前身創設時寄宿舍便所建築と京都大学吉田寮便所建築物が同一であることの考証 | IX. おわりに |
| V. 吉田寮舎の付加的意匠装飾 | X. 参考文献 |
- 添付資料： 京都大学寄宿舍吉田寮実測図面

I. はじめに



写真1 京都大学吉田寮正面玄関 2012年2月撮影²⁾

拙著者論文「京都大学寄宿舍吉田寮食堂建築物の調査実測によるその京都大学内で最古の建築物である実証」¹⁾にて、京都大学寄宿舍吉田寮食堂建築物が京都大学構内で最古となる建築物であることを発見し実証したが、本稿では、歴史資料と調査実測にもとづいて京都大学寄宿舍吉田寮便所建築物が京都大学前身寄宿舍便所建築物を移築改造して現在にあり、京都大学寄宿舍吉田寮便所建築物も京都大学寄宿舍吉田寮食堂建築物と同様に京都大学内での最古となる建築物であることを考証し、また、解体された京都大学前身寄宿舍建築の材料がどの様に京都大学寄宿舍吉田寮舎建設に使われ、現在に息づいているのかを考察し、下章に記して報告する。

日本および文部科学省また京都大学の文化と歴史・学術資産の向上、また京都大学の施設計

画ならびに施設運用の一助となる新たな知見を提示する。

II. 京都大学の歴史と京都大学前身創設時の施設および京都大学吉田寮の概要

実証内容の理解を助ける為に、京都大学の歴史と京都大学前身創設時の諸施設および京都大学寄宿舍吉田寮の概要を既出書より参照引用し説明すると、京都大学（以下京大と略称）の京都市左京区吉田での歴史は、第三高等中学校（以下三高と略称）の敷地選定のための文省森有礼による愛宕郡吉田村（当時の地名）視察³⁾とその後の1886年12月6日（明治19年）に文部省より設置区域が達せられた時より始まる³⁾。1887年6月1日（明治20年）に起工し⁴⁾、1887年6月（明治20年）には文部省の四等技師久留正道と三等技師山口半六が京都に出張し、7月にかけて敷地の測量調査を行なっている³⁾。そして、新校舎と諸施設は山口半六と久留正道の設計により⁵⁾山本治兵衛の現場管理の下⁵⁾、1889年（明治22年）7月に本校舎・寄宿舍（写真2・3・4・5）および便所（写真2・3・4・5）・食堂（写真5）・厨房・浴室が竣工。8月に雨天体操場・事務所・教師館が竣工。9月に科学実験場が竣工。9月11日開校式が行われ、遅れて11月に物理学実験場が竣工した³⁾。



写真2 京都大学前身寄宿舍 1897年撮影⁶⁾

この工事の請負は日本土木会社、三上吉兵衛、公営組の3業者により、当時京都の大工棟梁の

随一とうたわれた三上吉兵衛は、寄宿舍など木造建築を一手にひきうけている。⁷⁾ 1893年(明治26年)には敷地の南辺中央より少し西よりに正門が開けられた。正門、本校、雨天体操場、寄宿舍(図5)が南北軸線上約4度西にずれた線上にはほぼ正確に並び、さらに水路を越えたところに食堂、賄所および浴室が配置されている⁸⁾(図1)。また、その後1897年6月18日(明治30年)勅令第209号をもって京大(京都帝国大学)が設立されたがその諸施設は三高の諸施設そのものを引き継いだ⁹⁾施設内容である。



写真3 京都大学前身寄宿舍⁶⁾



写真4 京都大学前身寄宿舍 1897年撮影⁶⁾

寄宿舍はその後、京都大学の経営上実績の甚だ挙がらなかった木下総長に代わり就任した岡田総長は1907年(明治40年)11月11日の評議会席上「一 寄宿舍ヲ増築拡張スル事 但シ今日ニ於テハ直ニ之ヲ決行スルコト能ハサルカ故ニ時期ヲ見テ成ルヘク早く断行スルコト」などの提案

を行い、決定をみたうえ、予算の関係上しばらく時期を見ることとされた寄宿舍増築を除いて、順次実行され³⁾、1911年(明治44年)に大学側が寄宿舍建て替えを立案し、6月29日、建て替え案について現舎生に初めて説明を行い³⁾、1912年(明治45年大正1年)2月に解散式³⁾が行われ、閉舎される。



写真5 京都大学前身寄宿舍 1897年撮影⁶⁾



写真6 吉田寮舎 2012年2月撮影²⁾

京都大学寄宿舍吉田寮(以下吉田寮と略称)の歴史は、上記寄宿舍概要の1912年(明治45年)本部構内の三高時代より続く1889年7月竣工の寄宿舍および便所・食堂・賄所・浴室(写真2・3・4・5)の建て替えにより³⁾本部構内敷地より約300m南下した敷地(吉田近衛町69番地)へ場所を移り、寄宿舍と食堂および賄所・浴室は共に山本治兵衛と永瀬狂三の設計³⁾により、1913年(大正2年)9月11日に学生控所の東に3棟からなる新しい寄宿舍(写真1・6・7・16・17及び図7・8・9・10)が竣工、10月1日に開舎式を挙

行した。³⁾ 以上が京都大学百年史による説明であるが、大正 2～15 年出版の京都帝国大学一覧では「大正元二兩年度ニ亘リ田中通近衛上ル東側ニ改築シ九月十日ヨリ開舎セリ」⁸⁾ とあり、京都大学百年史写真集では「1913 年に新築された。」²⁾ また、京都大学文書館『吉田寮関係資料』解説・目録では「1913 年 9 月、学生控所の横に寄宿舎が新築された。」⁹⁾ その他ではフリー百科事典 Wikipedia 京都大学吉田寮では「竣工は 1913 年(大正 2 年)。旧制第三高等学校の学生寄宿舎の廃材を利用して建設された木造 2 階建てで、北寮、中寮、南寮と呼ばれる 3 棟および関連施設からなる。東京大学駒場寮が閉寮した現在、現存する日本最古の大学寄宿舎である。」¹⁰⁾ とあり、吉田寮舎の起源を示す表現は、さまざまである。京都帝国大学一覧の「改築」は改めて築造なのか、今日的表現の改築なのかは不明であるが、その資料を参考に書かれているであろう京大百年史は改めて築造の意味に解しているのか「新たに」及び別項では「新築」の表現をとっている。

以上が京都大学百年史および既出書による説明である。

また、吉田寮は、寮生による自治寮として、自治会は長年にわたり寮舎を存続・維持させて現在に至っている。

Ⅲ. 歴史資料による京都大学前身創設時寄宿舎建築の解析

1889年(明治22年)竣工の京大前身創設時寄宿舎は木造3階建てで、3階部分は屋根裏部屋式になっており、屋根窓により採光と換気をおこなう形式であり、外壁は下見板張り仕上である。⁷⁾ 屋根は写真1より、棧瓦葺きで棟の両端に鬼瓦がある。また、その便所は写真2及び3・4・5そして図1より寄宿舎の東西の外に在り渡り廊下(写真4)で接続されている。渡り廊下の屋根軒先は便所の屋根軒先と同じ高さであり、便所の

外壁と屋根の仕上げは写真2及び3・4から寄宿舎と同様であると言える。

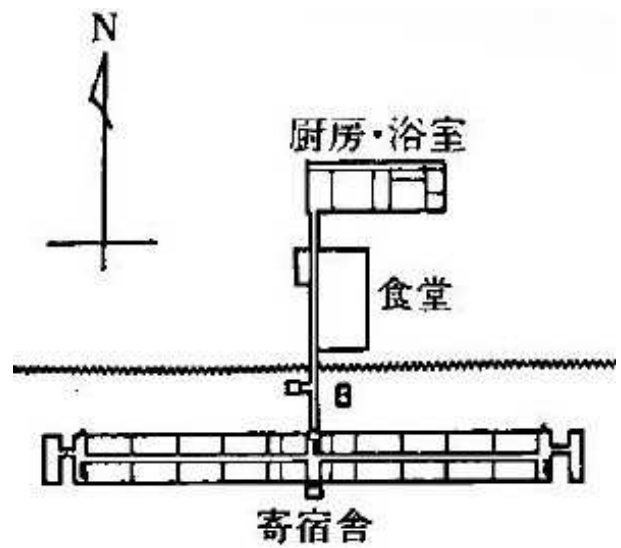


図1 1889年(明治22年)京大前身創設時寄宿舎平面図³⁾

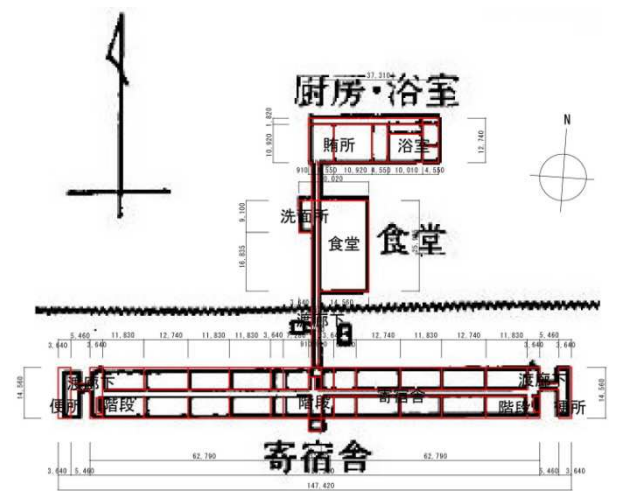


図2 図1を下敷きにした考察過程図¹¹⁾

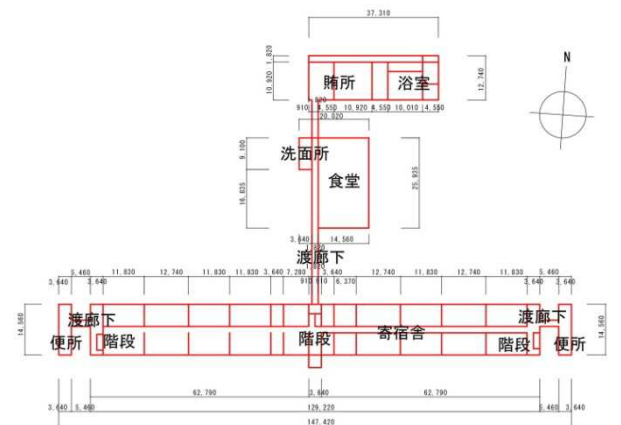


図3 推定京大前身創設時寄宿舎平面図¹¹⁾

寄宿舍の玄関は建築中央の南面した張り出し部分にあり、玄関より入り正面の奥に階段室がある。1階居室構成は玄関より東西端部に至る中廊下の左右に展開している。さらに廊下の東西両端にそれぞれ階段室があり、これにより寄宿舍には3ヶ所の階段室があったことがわかる。

つぎに寄宿舍の概要的規模と各部の概要推察寸法であるが、寄宿舍の南北の幅は写真2及び3・4の母屋の数から8間であり、「京都大学寄宿舍吉田寮食堂建築物の調査実測によるその京都大学内で最古の建築物である実証」¹⁾により寄宿舍食堂部分の建築寸法があきらかになったことにより、他の部分を図2のように推察すると、図3の推定図を得る事が出来る。また、この考察では吉田寮食堂建築物の調査実測により1間は芯々1820mmであることが判っている。これにより、寄宿舍部分の南北幅は14560mmで東西幅129220mm(±910mm)となる。その3つの階段室の幅は3640mmで踊り場の奥行きは1365mmであり階段幅は1820mmである。また、便所の梁桁幅は3640mmで桁桁幅は14560mmである。

IV. 京都大学前身創設時寄宿舍便所建築と京都大学吉田寮便所建築物が同一であることの考証



写真7 吉田寮便所建築 2012年撮影²⁾

吉田寮舎は、末尾資料平面図8の平行する3棟の寮本体東端にそれぞれ渡り廊下で接続された便所建築3棟と3棟の寮本体を結ぶ西側の南北に延びる管理舎の北端に渡り廊下で接続された便所建築1棟からなる4棟の便所建築をもっており、3棟が写真6左手前の建築物で梁桁方向に渡り廊下を取り付いており(図4及び図5)、残りの1棟が写真7の建築物で桁桁方向に渡り廊下を取り付いている。(末尾資料平面図8の北西角)その平面領域は4棟共に梁桁3640mm桁桁5460mm(3間)である。

京大前身創設時寄宿舍便所と吉田寮便所とを比較すると、写真2の右側及び写真3の右側に写る京大前身創設時寄宿舍便所建築画像と写真7に写る吉田寮便所建築画像を見るならば両建築が極めて同様の立面構成をもっていることは誰の目にもあきらかである。具体的には、妻面の立面矩形・妻面の出入口・ガラリー付越屋根の存在・桁桁面GL上に並ぶ汚物汲み取り口・その上部に並ぶ連続した窓・屋根の仕上げと形態・外壁仕上げなどで、外部的建築要素のほとんどと言える類似である。また、京大前身創設時寄宿舍便所の梁桁寸法は、3640mmで吉田寮便所のそれも3640mmで同じある。内部構成は、京大前身創設時寄宿舍便所では図6にあるように長手方向に大使用個室がならびその向かいに小使用空間があり、吉田寮便所は図4が示すように京大前身創設時寄宿舍便所と同様の内部構成である。また、吉田寮便所内にある写真8の間仕切り壁に見られる装飾は吉田寮舎内の他の場所では見出しせず、意匠は異質であり吉田寮食堂の意匠に近い要素であり古様である。

以上の事実及び吉田寮食堂の事例¹⁾またその消失と出現の時期ならびに、歴史経緯と地理的近接より吉田寮便所も京大前身創設時寄宿舍便所を移築・再構成して現在にあると考察するのが合理的であろう。

次に京大前身創設時寄宿舍便所建築と吉田寮

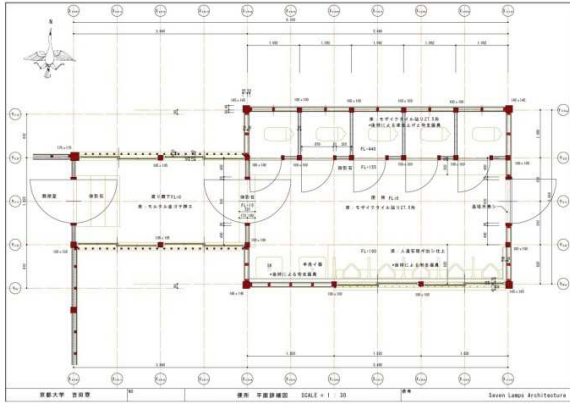


図4 実測吉田寮便所平面詳細図¹³⁾



図5 実測吉田寮便所断面詳細図¹³⁾

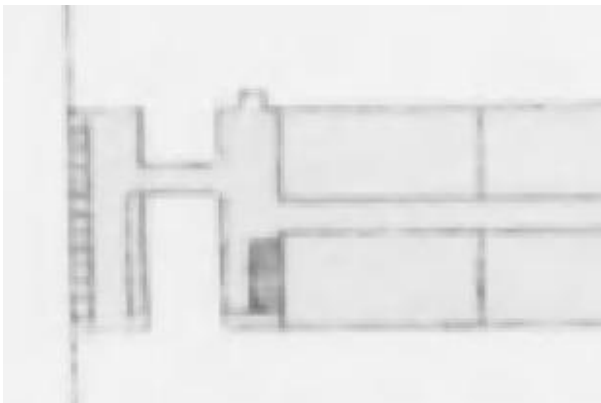


図6 第三高等中学校一覽 明治25年 寄宿舎平面図便所部分¹²⁾

便所建築の相違点であるが、京大前身創設時寄宿舎便所が桁桁8間（14560 mm）であるのに対し吉田寮便所は桁桁3間（5640 mm）である。また、吉田寮便所にある外部桁桁面 GL 上に並ぶ汚物汲み取り口の直上の木製庇と小窓が京大前身創設時寄宿舎便所の写真資料からは見い出せないことである。

上記の相違点より、この移築内容は、8間長の2棟の京大前身創設時寄宿舎便所を3間長に切り離し4棟の吉田寮便所として移築したと推察が出来る。また、大使用個室の換気をより良くする為にその下部へ小窓を増設し、これへの雨架かりを防ぐための庇を付加した変更を加えている。近年に衛生機器の取替え、取り付けが施され、現在に在るものである。



写真8 吉田寮便所内間仕切り壁とその柱頭²⁾

V. 吉田寮舎の付加的意匠装飾

吉田寮舎全体を見渡した時、付加的意匠装飾があるのは、各室天井換気口・玄関天井換気口・階段下梁受材・庇持出肘金物・庇下腕木端部・天井廻縁の面取り・屋根鼻隠及び破風板・建具・窓額縁・防火壁頂部意匠・階段廻りの親柱形態と陰刻文様及び手摺子の陰刻文様・階段踏板小口面取りと便所袖壁の柱部分柱頭のみである。（写真8・9）

これらは、全て機能の延長上にある装飾意匠であり装飾のための装飾が一切無いのが吉田の特徴である。

また、前章で竣工年を考証した便所がもつ建具（写真9上から4段目の左から2番目の建具Bと3番目の建具C）と同一の建具が寮舎内の別の場所にも複数見られ、これらは京大前身創設時寄宿舎の解体時に取り外され移設されたと思われる、他にも同様の部材が有ると考察できる。また吉田寮舎屋根の棟瓦は、京箱型棟瓦で1889年



写真 9²⁾ 上左より各室天井換気口及び天井廻縁・玄関天井換気口及び天井廻縁・階段下梁受材・庇持出肘金物A・庇持出肘金物B・庇持出肘金物C及び庇下腕木端部・軒裏廻縁の面取り・屋根鼻隠・建具A・建具B・建具C・建具D・建具E・建具F・建具G・建具H・建具I及び外部窓枠押え縁・建具I細部・防火壁頂部意匠・階段親柱・階段手摺子

11月竣工の物理学実験所と同意匠である。

上記の事から様式的概念で吉田寮舎建築全体を画一に表現することは避け、その他一々の様式考察は別稿にし、本稿ではこれらの意匠部位の中で特徴的で特異な階段廻りを次のVI章で考察する。

VI. 京都大学前身創設時寄宿舍階段と京都大学吉田寮階段の比較考察



写真 10 吉田寮舎南寮東階段室²⁾

京都大学前身創設時寄宿舍階段はIII章で概要説明をしてあるが、吉田寮階段は写真 10 及び写真 11・12 と末尾掲載平面図 8 に表された 3 棟の寮舎本体防火壁東側と寮舎本体東端にそれぞれ階段室があり、計 6 ケ所である。その内、防火壁東側階段室 3 ケ所は階段室の幅が 2730mm で階段幅は 1365mm であり、踊場の奥行きも 1365mm である。また、寮舎本体東端階段室の 3 ケ所は階段室の幅が 3640mm で階段幅は 1820mm であり、踊場の奥行きは 1365mm である。この 6 ケ所の階段室及び階段の意匠および構成要素と材質なら

びに構造は同一である。



写真 11 吉田寮舎北寮西階段手摺²⁾

一般に階段室はその建築の特徴・特性・意匠をよく表す場所であり吉田寮舎においても同様であるが、その特徴・特性・意匠が吉田寮舎を全体感及び階段室で見た場合に「質・実・強・健・理」が相応しくよそゆきの顔はないが、この階段には「威厳・体裁・主張・質・強」が見え、異質として目に映る。また、吉田寮舎内の意匠で納まり上の違和感がある写真 12 左に見える階段の側桁から巾木に繋がる意匠が途中で途絶えて異質感をさいだたせている。また、写真 12 右に見える壁付の階段室手摺親柱にある文様は壁面中に埋没しており違和感を覚える。これらの状態は一般的に移設及び移築並びに改修工事によって現れる現象であることが多い。

これを考察するに、第 2 章にて記した「予算の関係上云々」の内容から吉田寮舎の建設費は非常に限られた予算であった事が想像出来、一般に建築費の掛る部分である階段への対策として、吉田寮食堂建築並びに吉田寮便所建築及び前章の建具の扱われ方の事を合わせて考察するならば、この吉田寮階段も京都大学前身創設時寄宿舍階段を移植・移設したと考えるのが自然であり、その方法として、3階建ての京都大学前身創設時寄宿舍にあった3ヶ所の階段は1層分づつの計6単位に分けられ、この内3単位は幅を

1820 mmから 1350 mmに短縮し残り 3 単位はそのままに、吉田寮舎の 6 ヶ所ある階段室へ移植・移設したと考えられ、上記により、写真 12 に見える状態の理由も合理的に解せる。

この様に考えるならば、この階段の手摺親柱及び手摺子に在る文様の意匠意図が第三高等中学を象徴する三及び三線であることが想像できる。



写真 12 吉田寮舎南寮西階段²⁾

VII. 京都大学吉田寮の床下構造材及び小屋裏構造材から考察する全体構成



写真 13 吉田寮舎床下調査写真²⁾

2011年11月から2012年5月にかけて行われた調査実測から吉田寮舎床下及び小屋裏の状況を報告し考察をする。

写真 13 の面付水平材である根太掛に視える痕跡は、一般には母屋材または桁材に残る垂木が接する場所に現れる形態であり、その痕跡間隔は 455 mm である。その材料をひき割った物が写真のそれであると判断できる。また、食堂の小屋組

みの特徴から母屋材は登り梁に転び止材を付加して登り梁に平行な搔き込みを持たせていることから、急勾配の屋根をもつ京都大学前身創設時寄宿舍（写真 2 及び 3・4）も同様であったと仮定すれば、この材はもと桁材である。また写真 14 の材料はもと柱材である痕跡のホゾ穴と搔込みが視える。これらは吉田寮舎の床下構造材として特殊なものでなく、外壁基礎上の土台と部屋内に延びる柱材を除き、ほぼ全てと思われるほどの転用材が構造材として使われている。それらの材料は構造材として十分な大きさ以上の寸法を持ち、共に木目の詰んだ良材が使われ、構造材としてたいへん良好に機能している。この状況は小屋裏(写真 15)についても同様である。



写真 14 吉田寮舎床下調査写真 2)

この事から、吉田寮舎として本体木部構造材の内、化粧材と成る柱・垂木・階段廻りの桁及び梁材以外の化粧に成らない木部構造材は徹底して転用材を用いた事がわかる。また、前章のことを合わせて考えるならば、転用の痕跡が残らない、または転用痕が目視で視えない部材に於いても転用材であることが疑える。京都大学前身創設時寄宿舍（写真 2 及び 3・4）に視える外壁の 1 階と 2 階の間にある水平材は壁面水切り部材と思われるが、吉田寮舎のそれと酷似している。また外壁は下見板張りで共通している。そして吉田寮舎南寮屋根裏棟木の転用材には「い九拾」の墨書き(写真 17)があり、吉田寮の

工事の為の墨書きとは明らかに異なっており、この墨書きの番付が半間ごとの番付であるならば元々の建物は 910 mm x 89 で約 80.99m以上の長さを持つ長大な建物であったことが分かり、その建物の解体部材を利用して吉田寮舎南寮屋根裏棟木としていることが分かる。この部材の元々の建物を想起するならばその長大さから京都大学前身創設時寄宿舍であろう。



写真 15 吉田寮舎小屋裏調査写真 2)



写真 16 吉田寮舎 2011 年撮影 2)



写真 17 吉田寮舎 2011 年撮影 2)

一般的な実務的合理性から考察するならば、京都大学前身創設時寄宿舍の解体と上記の様な吉田寮舎の建築計画からすれば、経済的負担の大きい吉田寮舎の御影石製基礎石材・米松床材・

御影石製小階段・御影石製床下束石・屋根瓦材・一部の廻り縁等も転用材の可能性が高い。

そして、その転用材の元の持ち主は京都大学前身創設時寄宿舍であったと考えるのが自然であろう。

VIII. 結論

考証としての上記IV章により、吉田寮便所建築は京都大学前身創設時寄宿舍便所建築を移築して現在にあると思われる。その竣工年は1889年(明治22年)7月であり、京大で最古とされてきた旧物理学実験所の竣工年は9月11日の開校式に遅れる1889年(明治22年)11月である事より、吉田寮便所建築は吉田寮食堂建築と同様に京大最古の建築施設であると思われる。

また、その設計は山本治兵衛と永瀬狂三とされているが、設計は山口半六と久留正道であり、山本治兵衛と永瀬狂三により吉田寮舎へ移築・改変されたといえるであろう。その移築完了年は、1913年(大正2年)9月11日である。

現状に於いて、吉田寮舎の便所建築は4棟共に、一部の劣化はあるが、全体的には非常によく存在を保持している。

上記V・VI・VII章により、吉田寮舎建築内には階段をはじめ構造材及び構成部材・建具にいたるまで多くの京都大学前身創設時寄宿舍部材が使われていると思われ、歴史の蓄積がそれらを一体のものとさせ、吉田寮舎の中で現在も息づいている。

吉田寮舎建築は近代建築史及び文化史上たいへん特異で無二の価値があり、重要な建築価値を要している。

IX. おわりに

吉田寮舎の建築は、「京都大学前身創設時寄宿舍の解体材料を利用した新築工事」と表現するよりは、「京都大学前身創設時寄宿舍の構成材を再構成し再構築した建築」と表現するほうが相応しいと思われる。

山本治兵衛は京都大学前身創設時の建築に工事管理者として当初より関わり、その建築内容を熟知していた一人であり、多くの思いがそこに取り付けていただろうことは想像に容易い。その建築が大学の事情により明治40年に解体方針が出て明治44年に新舎の計画案が示されるまでの5年を掛け、彼は大学の事情と限られた予算の中、様々な思いを留める「再構成と再構築」の手段を取り、虚飾を遠ざけ健全な建築を、情念を持って達成したと推測する。また、その利用者への思いもそこへ託されているように思われる。一般に、この方法手段は、新材による新築計画よりも手間と根気と段取りが必要である。

吉田寮食堂建築物が「京都大学寄宿舍吉田寮食堂建築物の調査実測によるその京都大学内で最古の建築物である実証」¹⁾の中で述べた文化的・歴史的・建築的価値をもつように、吉田寮舎本体建築物及び吉田寮便所建築物も同様であり、これらを建築群と見るとき、その価値はより大きな物となる。大学に於いて最も重要な“人”の文化と歴史が“大学の文化と歴史”と並行してこの群の中に存在し、大学にとっての“人”を映す鏡であると同時にそれを表象する空間となるであろう。

また、京都大学前身創設時寄宿舍の構成材を再構成し、再構築した建築手法は当時のさまざまな状況より生じた方法手段であったと思われるが“再構成と再構築”は、近代建築の主題でもあり、現代建築に於いても同様である。この観点からも吉田寮舎は近代建築史において特別の存在で建築価値基準の新たな分類になると思われる。また、吉田寮には人・社会・世相・文化などの学術的研究価値が厚く堆積しており、多角的研究が進めば更なる価値が表象されると思われる。

吉田寮建築に関わる建築家を短く紹介する。山口半六は1858年(安政5年)生まれ。14歳で大学南校に入り、19歳でフランスへ留学し22歳で

学位を受けた。これは海外に於いて建築学の位記を受けた最初の日本人として永く記念されており、初代の文部省会計課建築掛長でもある。⁷⁾ その多くの作品は重要文化財・有形登録文化財となっている。

久留正道は 1855 年(安政 2 年)生まれ。明治 20 年代前半は山口半六と共に高等中学校の設計に従事した。「学校建築図説明及設計大要」を著す。2 代目の文部省会計課建築掛長であり、学校建築の功労者とたたえられる人物である。⁷⁾

山本治兵衛は 1854 年(安政元年)生まれ。幕府作事方匠家の立川知方のもとで修業し、文部省会計課建築技師となり、文部省京都出張所長・文部大臣官房建築課福岡出張所長・初代京都大学建築部長となると同時に文部大臣官房建築課京都出張所長心得となる。3 高、4 高、6 高、福岡医科大学、京都高等工芸、岡山医専、第 2 女子高等師範、など⁷⁾ 多くの学校建築を手がけた。

永瀬狂三は 1877 年(明治 10 年)生まれ。京都大学本部本館の共同設計者として知られ、2 代目京都大学建築部長、京都工学校校長。

これだけの建築家が設計者として関係関与している建築は稀であり、この事だけでも建築史上重要な建築である。

フリー百科事典 Wikipedia 京都大学吉田寮「竣工は 1913 年(大正 2 年)。旧制第三高等学校の学生寄宿舍の廃材を利用して建設された木造 2 階建てで、北寮、中寮、南寮と呼ばれる 3 棟および関連施設からなる。」¹⁰⁾ とあるが、建築素材への認識の無さから、一度使われた材料・部材を忌み嫌い廃材とか中古材料などと称す方々がいるが、移築・移設を目的にした材料は、廃材とは言わない。痛んだ材料は建材として使用することはなく、時間を経過した木材は、新材に比べ木の縮み・痩せ・反りなどの症状が少なく、物理的に安定した素材材料であり、木地の風合いも増して美しくなるのが普通である。見識と審美眼を持つ人々は、それら古材こざいを適材

適所に利用するために探し求め、時に新材より遥かに高額な代金を支払って入手しているのが実情である。

良材を産業廃棄物にし、粗末材を新築材とする産業的商業的指向には憂うものがある。産業と文化と自然環境の観点からも建築物への認識の変化を望みたい。

京都大学寄宿舍吉田寮舎建築群の価値を本稿により多少なりとも認識して頂けるならば、最高学府である京都大学全学の英知によって補修保存および健全な活用をしていただけると信じる。



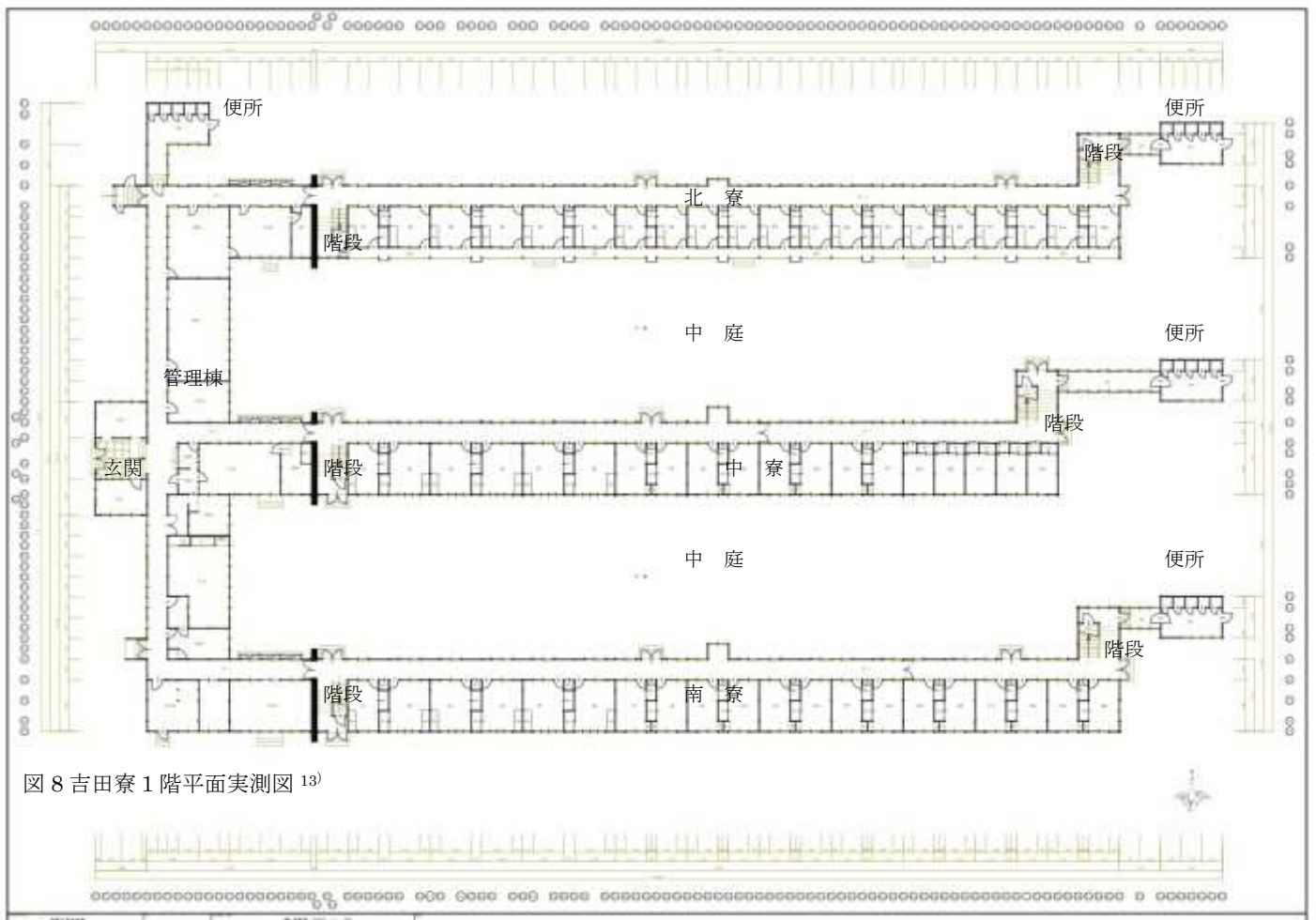
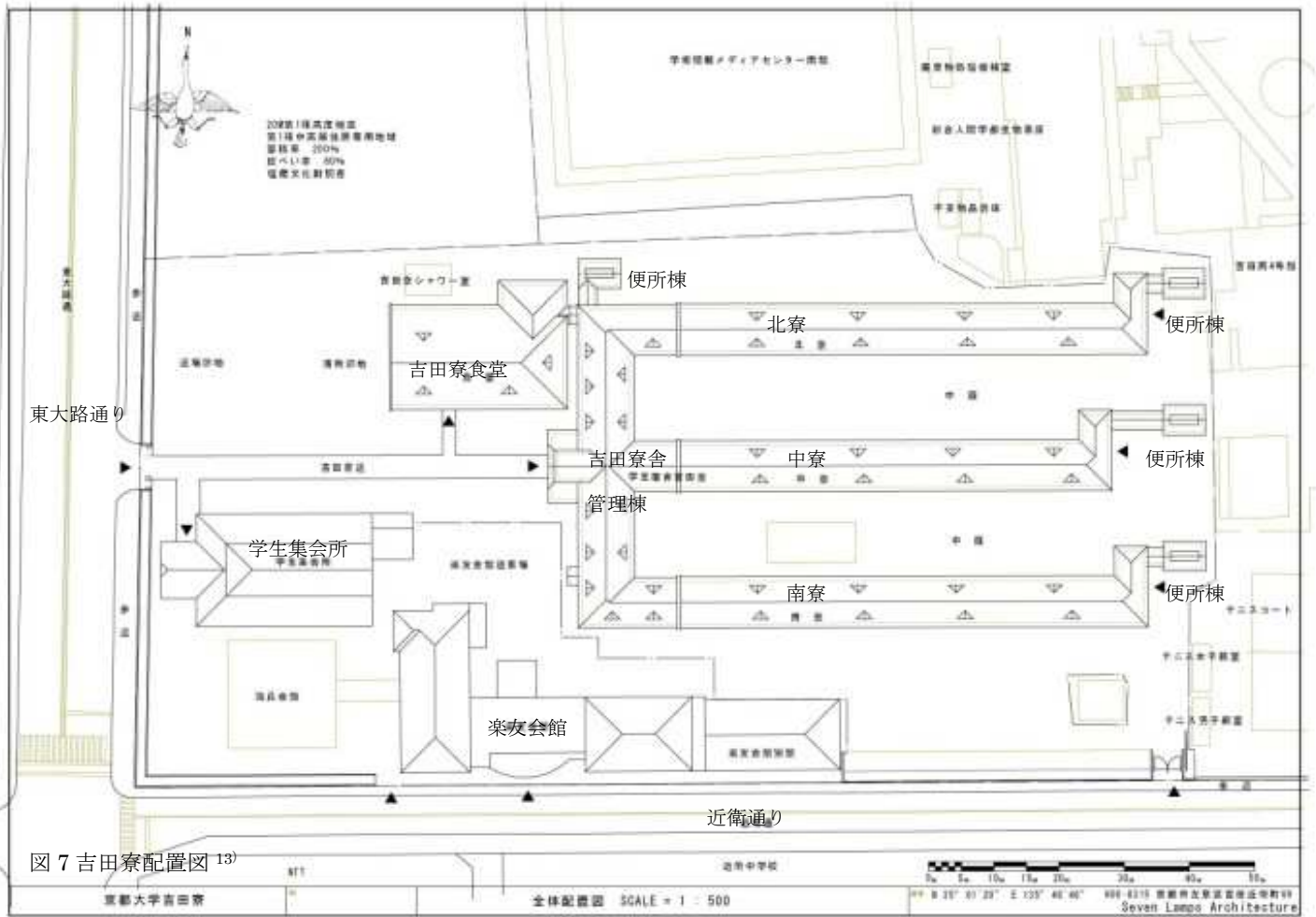
写真 17 吉田寮舎及び食堂 2012 年撮影²⁾

X. 参考文献

- 1) 山根芳洋「京都大学寄宿舍吉田寮食堂建築物の調査実測によるその京都大学内で最古の建築物である実証」2012 年
- 2) 七灯社建築研究所所蔵「吉田寮実測調査写真画像」七灯社建築研究所 2011~2012 年
- 3) 京都大学百年史編集委員会「京都大学百年史」京都大学後援会 1997~2001 年
- 4) 日出新聞 明治 22 年 8 月 1 日
- 5) 宮本雅明、谷直樹「京大構内に於ける明治期の建築について」日本建築学会近畿支部研究報告書 904pp437 1975 年度
- 6) 京都大学文書館所蔵写真 B-01204・A-02101・A-02001
- 7) 京都大学広報委員会「京都大学八十年のあゆみ-京都大学歴史的建造物調査報告-」1977 年

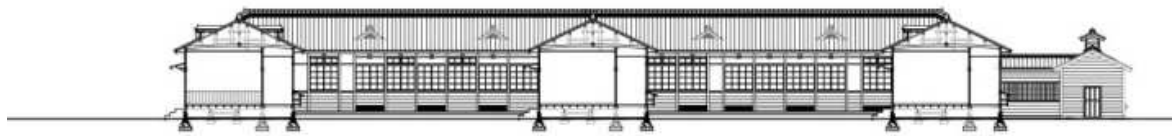
- 8) 京都帝国大学編「京都帝国大学一覽. 自大正 5 年 至
大正 6 年」京都帝国大学 大正 2～15 年
- 9) 京都大学文書館 「『吉田寮関係資料』解説・目録 京
都大学文書館 発行 2009 年 3 月 3 日
- 10) フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)京都大
学吉田寮 <http://ja.wikipedia.org>
- 11) 七灯社建築研究所「吉田寮実測調査研究図書」七灯
社建築研究所 2012
- 12) 第三高等中学校「第三高等中学校一覽自明治二十五
年九月至明治二六年八月」第三高等中学校 国立国
会図書館蔵
- 13) 七灯社建築研究所「吉田寮実測調査図書」七灯社建
築研究所 2012







西面立面图



管理舍東面立面图



图 9 吉田寮東及び西立面实测图¹³⁾

寮舍東面立面图

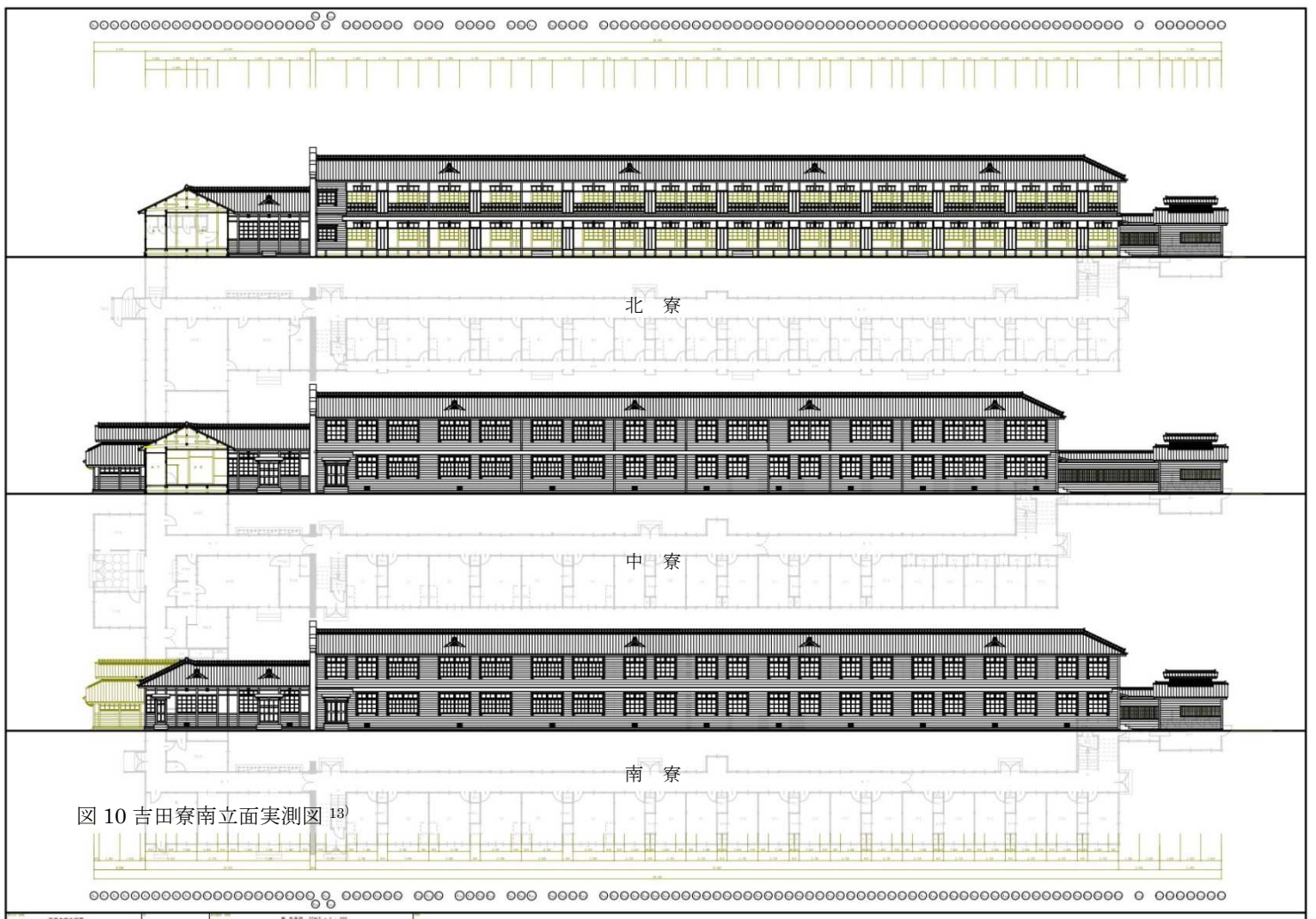


图 10 吉田寮南立面实测图¹³⁾